

対人関係に困難さを抱える児童の背景をとらえた支援の在り方 ～客観的事実に基づく児童の行動の背景と困難さの理解～（二年度）

長期研究員 山口 綾

I はじめに

学校現場では、「集団行動がとれない」「人間関係が上手く築けない」等の難しさのある児童生徒がいる。福島県教員委員会が平成 30 年度に行った調査報告によると、小・中学校の通常の学級の中で、特別な教育的支援を必要とする児童生徒が 6.0%おり、その中には「人間関係やこだわり等」で困難さを抱える児童生徒も含まれている。小学校の学級担任にとっては、そのような児童に対し、どのように指導・支援を行っていけばよいか切実な悩みになっている。

小学校学習指導要領総則編第 3 章第 4 節「児童の発達の支援」では、「(前略) 一人一人の児童を客観的かつ総合的に認識することが児童理解の第一歩である」とある。また学校生活への適応や人間関係の形成などについて、「カウンセリングの実施に当たっては個々の児童の多様な実態や一人一人が抱える課題や、その背景などを把握すること、(中略)が必要である」と述べられている。そこで、児童の行動を「どこに注目するか」「なぜこのような行動をするのか」という視点で教師が考えることが、児童へのよりよい支援につながるのではないかと考え、研究テーマを設定した。

II 研究の目的

対人関係に困難さを抱える児童に対する、行動の背景をとらえた適切な支援の在り方について考察する。

III 研究計画

1 研究対象

研究協力校 T 小学校高学年 2 学級より、対人関係のトラブルが多い児童 3 名（以下；A 児、B 児、C 児）を抽出した。

2 研究の内容と方法

(1) 児童の行動の背景をとらえるための情報収集と整理

- ① 児童の全体像の把握
 - ・ 情報収集シート全体版
- ② 対人関係で気になる行動を 1 つに絞りエピソードを収集
 - ・ 情報収集シート焦点化版
- ③ エピソードの整理と振り返り
 - ・ 児童の行動の変容を基に整理した一覧表

(2) 客観的事実に基づく背景の推測

- ① 児童の行動パターンの理解と「なぜこのような行動をするのか」という視点で背景の推測
- ② 背景をとらえた支援の検討

(3) 支援の実際と考察

- ① 支援の実施
- ② エピソードの記録と考察

以上の研究内容(1)(2)(3)について、A 児、B 児、C 児の担任の協力のもと実践研究を進め、効果を検証する。また、並行して文献研究を行い、実践の手がかりとなる情報を得る。

IV 研究の実際

1 児童の背景をとらえるための情報収集と整理

山本、池田(2005)は、「子どもが安定して活動できる教育環境を整備するために、視点を子どもだけに向けるのではなく、また自分(先生)だけに向けるのではなく、1 歩離れたところから子どもと先生の『相互作用』をみる」と述べている。そしてこの 1 歩離れて相互作用を見ることを「引いた視点」と説明している。

本研究においては、この「引いた視点」によって客観的事実をとらえて、支援を考えていくことを実践することにした。客観的事実をとらえることで、行動の表面的なとらえや、先入観によるとらえではなく、その行動が何によって引き起こされ、周囲がどのように関わり、その結果どうなったのかまでの一連の流れから、行動の背景をとらえることを目指した。客観的事実に基づき児童の

行動を情報収集、整理していくため以下の図（図1）の①～③の方法で児童の情報収集や整理を行った。



図1 児童の行動の背景をとらえるための情報収集と整理

(1) 児童の全体像の把握

対人関係のトラブルが多いという印象で、起きた出来事について児童を指導するのではなく、児童に必要な指導をするためには、まず、児童の得意、苦手など、引いた視点での児童の様子や本人からの話を踏まえた児童の全体像を知っていくことが必要と考え、情報収集シート（全体版）を作成した（図2）。

図2 児童の全体像を知るための情報収集シート（全体版）

この情報収集シートは、協力校訪問時に抽出児童の姿について担任と確認し、項目同士の関連性を考え、担任の気づきにつなげるために使用した。

A児の例では、苦手なことの中にある「やりたいと思ったらすぐ行動する」という一面が、A児の得意な「発表する」ことにも関連しており、また「本が好き」ということが、読書に没頭するといった姿にも表れていた。これらのことから担任は、対人関係において、A児の行動は、わざと相手を困らせようという意図ではないと気づくことができた（図3）。

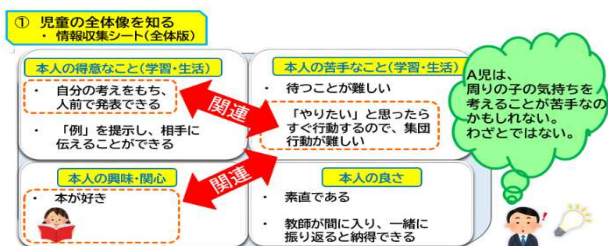


図3 全体像を知るための情報収集シート（A児）

(2) 対人関係で気になる行動を1つに絞りエピソードを収集

児童の行動が、何のきっかけで起こり、周囲の教師や児童がどのように関わり、その結果どうなったのかを観察するため、対人関係で気になる行動を1つに絞りエピソードを収集した。その際には、図4のような情報収集シート（焦点化版）を活用し、エピソードがあるたびに担任が記録を取りためていった。

図4 児童のエピソードを収集するための情報収集シート（焦点化版）

今回はA児の気になる行動の中でも一番表出することが多かった「自分の思いが通らないと配慮のない言動をすることで周囲と言い争いになる」という行動に絞ってエピソードを集めることにした。すると、「運動会の練習前、昇降口前で整列して待つという指示を出されていたが、A児は1人だけ校庭に行こうとした。周囲は止めたが、『なぜ、校庭に行ってはだめなのか』と納得しなかった。担任は不在だった。校長先生が来てA児の言い分を聞くが納得するまでに10分かかった。」など、自分のやりたいことを友達や教師に制止されると、感情を抑えるのが難しかったエピソードが多く集まったことから、A児の困難さの1つとして「興奮すると自分を抑えられない」という姿が浮かび上がってきた。

(3) エピソードの整理と振り返り

エピソードを記録した情報収集シートは、教師の関わりした後、児童の行動の変容が見られたものと見られなかったものの2つに整理した。

図5のように、一覧表に整理した後、A児の行動の変容が見られたエピソードを見て、担任が「行動の変容が見られたのはなぜか」という視点

で関わりを振り返った。A児の気持ちを担任が代弁した時には、A児は落ち着いて話を聞くことができていたと気づいた。逆に、「行動の変容が見られなかったのはなぜか」という視点で振り返ると、A児の言い分を十分に聞かずに指導した時には変容が見られなかったと気づいた。

こうした整理を通して、A児に合った指導方法があることに担任が気づくことができた。

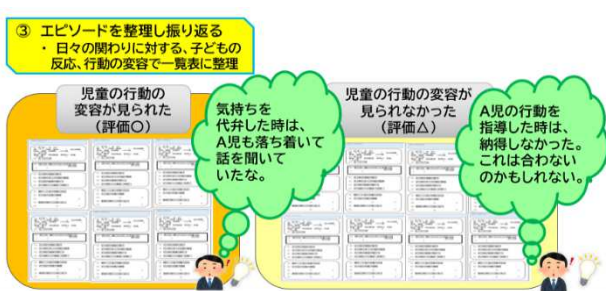


図5 収集したA児のエピソードの整理と振り返り

2 客観的事実に基づく背景の推測

(1) 児童の行動パターンの整理と「なぜこのような行動をするのか」という視点で背景の推測

上記の方法で客観的事実に基づき情報収集・整理していく中で、「どんな時に児童の不適切な行動が表れやすいのか」「どんな時であれば児童は落ち着いて行動できるのか」「本人に合った関わり方は何なのか」など、児童の行動パターンや、本人に合った関わり方を探った。そして行動パターンからの気づきを踏まえ、再び、児童の一番気になる行動を振り返るために「なぜこのような行動をするのか」という視点で、対人関係で困難さを抱える児童の行動の背景にあるものは何かを担任が推測した。

A児の担任は、「思ったことを言える」ことは場面によっては良さであるが、周囲とのトラブルにつながることもあったと考えた。これらを踏まえて「なぜ、自分の思いが通らないと配慮のない言動をするのか」と背景を考えると、自分の思いが強くなると行動を制御するのが難しくなるが、それを「悪い」と思っている様子が見えることから、「興奮すると気持ちを上手く話せないのではないか」(背景1)、そして、今までは周囲がどういう状況であっても自分の意見を通してきたことから、「相手に合わせて行動する経験が少ないの

ではないか」(背景2)と推測した。

(2) 背景をとらえた支援の検討

山本、池田(2005)は、「子どもたちが示すさまざまな問題行動を、一つ一つ別々にとらえるのではなく、もっと視野を広げて「個人と環境の相互作用」がどのような「状態」であるかを考える。問題行動それぞれについて個別に対応するというよりも、教育支援全体の中で、本人が安定して活動でき、新しいことを学習できる環境を作る」と述べている。

児童が適切な行動ができるようになるためには、直接的な働きかけだけではなく、児童に関わる友達や教師などの人的環境、教室や道具などの物理的環境を整えていくことも重要であると考えた。そのため、推測した背景を踏まえて、児童本人に対する支援の他に学級全体に対する支援を検討することとした。その際には、1-(1)(2)(3)で述べた児童の全体像や教師の関わりについての視点を参考にした。

A児の担任は、背景1を踏まえ、A児が自分を制御できない時に、今ある状況を本人に冷静に理解させたり、自分の気持ちを振り返らせたりするために「事実のみを伝える」「A児の気持ちを代弁する」の2つの手立てを考えた。学級全体に対する支援は、A児が行動を注意されると感情が制御できなくなってしまうことから、学級全体の約束として「友達を注意するのは担任である」というルールをクラス全体に話すことや、「トラブルの時は、互いの言い分をよく聞き整理して伝える」ことに努めた。

背景2に基づく支援としては、本人の適切な行動が見られた時は、褒めたり、認めたりして成功体験を積み重ねることや、本人の良さをクラスメートに広げることでA児と周囲をつなぐことを期待した。また活動の前に、集団の中でどのように行動するのかを「事前に伝える」ことで、A児の適切な行動が増えていくことをねらった。

(3) 支援の実際と考察

① A児の実践事例

ア 推測した背景と支援(表1)

表1 推測した背景と支援（A児）

背景1	本人に対する支援	学級全体に対する支援
興奮すると気持ちを上手く話せないのではないか。	・事実を伝える。 ・気持ちを代弁する。	・児童の指導は担任が行う。 ・トラブルの時は、お互いの言い分をよく聞く。
背景2	本人に対する支援	学級全体に対する支援
相手に合わせて行動する経験が少ないのではないか。	・適切な行動をした時に褒めたり認めたりする。	・児童の良さをクラスメートに伝える。 ・事前に伝える。

イ エピソード1

給食の準備中に当番に遅れたA児が、先に歩いていた児童を抜き先頭に立った。そこで、抜かれた児童と言い争いになった。担任は、言い争いが収まらなると判断し、A児の「興奮すると気持ちを上手く話せないのではないか」という背景を踏まえて「教室に戻り、当番表を見ながら視覚的にお互いの主張と事実を整理して伝える」支援をした。それにより他の児童はA児の思いを理解できた。しかし、A児はまだ興奮していた。担任は、A児が今の気持ちをどう表現したらよいかわからないのではと考え、さらに「A児の気持ちを代弁」し、納得しているけれどもそれを表現できずにいるA児に寄り添った。その後A児は、気持ちを切り替えることができた。

児童同士の言い分が食い違ったときに、A児は自分の言い分を主張することが多かった。しかし担任がA児の「興奮すると気持ちを上手く話せないのではないか」という背景を踏まえて、事実を視覚的に伝えたり、A児に関わった児童も含めてお互いの言い分をよく聞いたりする支援をしたことにより、互いの思いを理解し合うことができ、A児の言葉にできない気持ちを担任が理解することで、A児自身の納得が得られ、トラブルではなく、解決に向かうことができたと考える。

ウ エピソード2

体育の時間にハンドベースボールの準備運動で、A児はペアの児童とキャッチボールをしていた。A児は相手を取りやすいところへ投げられずにいた。担任は、このままだと、A児がうまく投げられない苛立ちを相手にぶつけてしまうかもしれないと考え、背景2を踏まえ「手本となるキャッチボールを見せる」支援を行い、A児の理解

を促した。A児はその様子をじっと見ていた。キャッチボールを再開した後、A児は、徐々に相手の胸元に投げることができるようになった。相手からも褒めてもらいA児もキャッチボールに前向きに取り組めた。他の児童からも、A児を認め励ます様子も見られた。キャッチボール終了後、担任からもA児が、手本を見て相手と協力しながら行動できたことを認める言葉かけがあり、A児は最後まで集中し授業に参加することができた。

担任がA児の「相手に合わせて行動する経験が少ないのではないか」という背景を考えていたため、相手の取りやすい位置を具体的に示すことで、わかりやすい支援に繋がったと考える。

② B児の実践事例

ア 推測した背景と支援（表2）

表2 推測した行動と支援（B児）

背景	本人に対する支援	学級全体に対する支援
見通しをもつことが苦手なのではないか。	・計画と一緒に考える。 ・確認をする。 ・グループ編成を考える。	・やることを事前に伝える。 ・手順は可視化する。

イ エピソード

総合的な学習の時間に、学習発表会に向けての準備を行っていた。B児は、学習発表会で用いるプレゼンテーション用の画像編集係を希望した。担任は、B児がアイデアが豊富なのでこの係が合っているのではないかと考えた。しかし、完成までの見通しに関して、周囲の児童とくいちがうことが予想されたので、「作業計画と一緒に考える」支援を行った。B児は他の児童と完成までの見通しを確認することができた。また、B児と担任とで立てた計画の作業を進めやすくするために、「画像編集の仕方や、パワーポイントの使い方など、作業内容を事前に、学級全体に指導しておく」という支援を行った。担任が事前に指導をしておくことで、B児は何をすれば作業が進むのかを理解できた。担任はさらに、「計画通りに進めるのが得意な児童とグループを組ませる」という支援も行った。B児は以前、作業の期限を忘れてしまうことがあったが、今回は同じグループの児童が声をかけ、忘れずに作業ができた。計画的に作業が

進むことでB児の心の余裕も生まれ、最初のうちは、自分の考えだけで進めようとしたが、他の児童のアドバイスを受け入れられるようになった。B児は最後まで作業が滞りなく進み、クラスメートと協力しながら作品を完成させることができた。

B児の行動の背景を意識して支援をしたことで、B児の成功体験が増え、見通しをもって行動する体験ができ、友達と共に取り組むことの良さを感じることができたと考える。

③ C児の実践事例

ア 推測した背景と支援

表3 推測した背景と支援（C児）

背景	本人に対する支援	学級全体に対する支援
周囲の状況を把握するのが難しいのではないかと推測された。	<ul style="list-style-type: none"> ・事実を伝える。 ・「なぜ」と原因を自分で考える。 ・状況を踏まえ行動を選択させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の注意は担任が行うというルールを学級全体に話す。 ・お互いを受け入れる雰囲気を作る。

イ エピソード

班別活動の行先をグループで相談して決める活動で、C児は、反対意見や別な案も出されたにも関わらず、自分の意見を通そうとした。そのため、時間内に決まらずグループ全員が困る場面があった。

担任は、このままでは、平行線で話し合いが進まないと考え、「話し合いで決まらない時は、C児のいる班だけ活動ができなくなること」、また「C児の考えは、費用もたくさんかかる上、時間もかかり他の場所が回れなくなる」ことを伝えた。C児は、現状を理解することができた。担任は、さらにC児に自分の言動を振り返られるように、「なぜ、今の話し合いで意見がまとまらなかったのか」について考える時間を設けた。C児は、「自分の意見ばかり述べて、友達の意見を聞いていなかった」と振り返ることができた。担任は振り返られたことを褒め、さらに、班での話し合いがスムーズに進むように、C児に対し行動の選択肢として、「代替案を出す」「自分の意見をあきらめて他の人の案に賛成する」「担任と相談した上で、できると判断した自分の意見を提案してみる」を提

示した。C児は、自分の案の実現が難しいことを認め、納得して「自分の意見をあきらめて他の人の案に賛成する」を選択した。その後の話し合いはスムーズに進み、班活動の内容が決定した。

担任が、本人の状況や、理由について考える支援をしたことで、C児自身が置かれている状況を理解し、それを納得して自らよりよい行動を選択することができた。このことから、本人自身が自分の考えを見つめて相手と折り合いをつけるという経験ができたと考える。

V 研究のまとめ

1 結果と考察

(1) 児童の行動の背景をとらえるための情報

収集と整理・客観的事実に基づく背景の推測

児童の行動の背景をとらえるための情報収集と整理、背景の推測の方法について、抽出児童担任の気づきを基に考察した。

【担任の気づき】

- 全体像を把握すると、児童には苦手なことが多いことがわかった。
- 観察する行動を1つに絞ったことで、より児童の苦手さを理解することができた。
- 児童の行動を整理して振り返ることで、教師の関わりの中で「改善するところ」が見えてきた。
- 背景を推測すると、「児童は、本当はこうだったのでは」という児童の気持ちが見えてきた。

観察する行動を1つに絞り、客観的事実を基に情報を収集し、整理すると、今まで見えてこなかった児童の行動の背景が見えてきたり、担任が、児童の表面には表れない気持ちを理解したりするなど、児童の新たな姿をとらえることができた。また、担任が児童の苦手なことの多さに気づくことで、「なぜ、できないのか」という視点から「本当は、苦手だからできなかったのだな」児童の立場に立って見ることができたと考える。それにより、教師の関わりの改善点も見えてきたと思われる。

(2) 背景をとらえた支援の実際

支援の実際を振り返るため、児童に対し学校生活に関するアンケートを5月と10月に実施し、内容を比較した。(表4)

表4 児童アンケート（一部抜粋）

Q1 友達と話す時、あなたは友達の気持ちを考えながら話をしていますか。			
	5月	10月	10月の理由
A児	思わない	どちらかというと思わない	どのように行動するか担任と考えてきた。
B児	そう思う	そう思う	友達にやさしくしよう意識してきた。
C児	そう思う	どちらかというと思わない	先生との話し合いの中で、自己中心的な部分に気づき1つ下げた。
Q2 友達は、あなたの気持ちを考えて話を聞いてくれると思いますか。			
	5月	10月	10月の理由
A児	そう思う	そう思う	5月より10月の方が友達が自分の話を聞いてくれていると感じる。クラスの一員になったと思う。
B児	思わない	どちらかと言うと思わない	自分の様子を見て、友達が察してくれていると感じる。
C児	どちらかというと思わない	どちらかというと思わない	以前より、真剣に自分の話を聞いてくれていると感じる。
Q3 自分の学級を気に入っていますか。			
	5月	10月	10月の理由
A児	そう思う	そう思う	5月より10月の方が友達に優しく声をかけてもらうことが増えた。
B児	そう思う	そう思う	自分が変わったら、周囲も変わったということを実感した。
C児	どちらかというと思わない	どちらかというと思わない	担任と相談しながら友達との関わり方を練習している。難しいが、以前よりできることが増えた。

抽出児童の担任は、情報収集・整理を行い、児童の全体像を踏まえながら行動の背景をとらえ、本人や学級全体への関わりを継続してきたことで、児童と落ち着いて話し、児童本人が理解し、納得できる関わりをすることができた。また、児童の良さをクラス全体で共有し児童の活躍の場を作ることもできたと考える。

児童からは、「どのように行動するかを担任と考えた。」「周囲からも優しい声掛けが増えた。」「自分も考えて行動するようになった。」という感想があり、背景をとらえた教師の支援が、本人や周囲のよりよい変容に繋がっていったと考える。

2 まとめ

これらの研究の実践と結果・考察から、児童の

背景をとらえたよりよい支援の在り方について次の4つにまとめる。

1つ目は、児童の姿をとらえるために客観的事実に着目し情報収集することである。「引いた視点」で児童を見つめることは、児童の行動に至るまでの状況を客観的にとらえることにつながり児童の状況や気持ちの理解は、支援の手がかりとなると考える。

2つ目は、背景の推測を通して、児童の困難さを理解し、教師の支援の意図を明確にすることである。児童の行動を様々な視点で観察し、背景を含めて振り返ったからこそ、より本人の困難さに寄り添った支援になっていくと考える。

3つ目は、教師が児童の立場で支援を振り返ったり、改善したりすることである。対人関係に困難さを抱える児童はこれまでに多くのつまづきを体験している。そのような児童に対し教師が支援をする際に、児童の希望や考えを確認して支援を実施したかを振り返り改善するという意識が大事であると考えられる。

4つ目は、教師との対話を通して、児童自身が状況を整理したり、選択・判断する経験を積み重ねたりすることで行動のレパートリーを増やすことである。児童が、教師とともに適切な行動を知り、選べるようになっていくと、児童自身の成功体験にもつながっていくと考える。

これらを継続することが、児童の背景をとらえたよりよい支援の在り方として必要だと考える。

VI おわりに

今回の研究を踏まえて、「視点をもった情報収集」「背景の推測」「教師の振り返りや改善」「児童との対話」という4つの視点を加えていくことで、対人関係だけではなく、他の児童の行動に対する教師の見方が変わり、支援が変わり、児童がよりよく変容するのではないかと考える。

今後に向けて、この支援の在り方を軸に、自らの学級経営を振り返り、児童理解を深め、一人一人の状況に寄り添った支援に努めていきたい。

最後に、研究に対しご指導ご協力いただいた全ての先生方に心からの感謝を申し上げます。

